広汎性発達障害の小学生を対象とした

SST グループ訓練の取り組み

かがわ総合リハビリテーション病院
言語聴覚士　古谷 まどか、河村 美香、宮地 理紗、高木 弘子

キーワード：広汎性発達障害、SST、グループ訓練、個人目標

要　旨

平成 24 年度より当センター言語療法室にて小学校低学年・中学年の子ども達を対象に SST グループ訓練を行っている。グループ訓練の中で子ども達一人ひとりの個人目標を設定したことにより変化がみられたケースがあった。個人目標を設定したことにより、ST・保護者・子どもの三者が問題点を共有し意識することで変化がみられたと考えられる。グループ訓練内でも個別の対応と環境設定を行う事が重要であることが分かった。

１．はじめに

当センター言語療法室では、平成23年度より広汎性発達障害の子ども達を対象にソーシャルスキルトレーニング(以下、SST)のグループ訓練を実施しており、幼稚園の年長児・小学１年生(幼児グループ)を対象とした。平成24年度からは小学校低学年・中学年(小学生グループ)も対象とし、幼児グループと小学生グループの2グループ行っている。小学生グループでは幼児グループとは異なり子ども達一人ひとりに個人目標を設定したことで変化がみられたので報告する。

２．小学校低学年・中学年の子ども達

広汎性発達障害を持つ小学校低学年・中学年の子ども達は、周囲の状況に気がつきにくい・年齢に比して自分の気持ちや理由を上手く説明できない・嫌な事が伝えられないという傾向がある。その結果、友達からのからかいの対象になりやすく、自信をなくしてしまうことがある。また、自信のなさから更に自分の気持ちを伝えにくくなる。以上のことが繰り返され、集団での問題が深刻化してくると考えられた。そこで、小学校低学年・中学年を対象としたSSTグループ訓練を計画、実施した。

SSTとは、対人関係につまずきがある子ども達がそれぞれの発達段階において獲得すべきコミュニケーションスキル習得の為に実施するものである。

３．SSTグループ訓練について

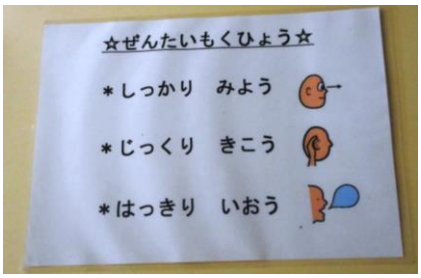
①目的

1)自分の周りの状況に気がつく　2)相手の気持ちを考える　3)自分と相手との違いに気がつく　4)自分の行動をコントロールする力を養う　ことで対人関係を築く能力、社会性を伸ばすことを目的としている。

②全体目標の設定

しっかりみよう（話をしている相手の顔を見る)、じっくりきこう（相手の話を聞く)、はっきり言おう(伝わるように発言する)、聞く時の姿勢(いい姿勢)、声の大きさを全体の目標とし、他者とコミュニケーションを取るに当たり必要なスキルを文字と図で示した。全体目標は毎回グループ訓練の始めに確認していた。(図１)(図２)

(図１　全体目標)



(図２　全体目標)

③内容

始まりの会(自己紹介)、ウォーミングアップ(体を使った活動)、場面設定課題、ロールプレイ(子どもが実際に設定された場面を演じる)、終わりの会(子ども達自身の自己評価)、各保護者との話し合い　の順番で実施した。

また、グループ訓練の初回時、中間、終了時に保護者と幼稚園・小学校の先生に対してアンケートを依頼した。内容は、日常生活や集団生活での様子や問題点、コミュニケーション方法についてとし、個別訓練での問題点との違いを捉えることを目的とした。

４．小学生グループについて

対象：小学校低学年・中学年の児童(以下、小学生グループ)

人数：4名

期間：平成24年7月から平成25年3月まで

頻度：月1回

目標：全体目標と個人目標を設定

課題内容：子ども同士が直接関わる機会を設け、やりとりや相談することを中心とした場面設定課題を多く取り入れた。

５．小学生グループの問題点と工夫点

SSTグループ訓練の様子から子ども達の問題点とそれに対する工夫した点を以下にまとめる。

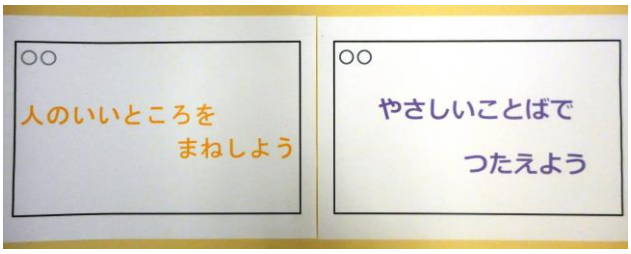
問題点：他児に興味を持ち、周りを見て行動することが難しく、他児の意見に同調できない・譲ることが難しいなど協調性に問題があった。また、個人により問題点が異なっていた。(図３)

工夫点：グループ訓練内で設定している全体目標(しっかりみよう・はっきりいおう・じっくりきこう)に加え、個人目標も設定した(図４)。個人目標を意識できるようになり、毎回のグループ訓練で全体目標とともに確認し、視界に入りやすいように掲示した。また、場面設定課題にも個人目標に沿った課題を取り入れ、自己評価用紙には個人目標を振りかえられる項目を作成した。以上をグループ訓練内で繰り返し行った。

(図３　問題点と工夫点)

問題点	当てられていないのに答える
→工夫	当てられるまで答えないと事前に約束した
問題点	他児に合わせることができない
→工夫	同調する場面を課題のなかで設定した
問題点	個人により問題点が異なる 例)周りに合わせることが難しい等
→工夫	個人目標を立てた

(図４　個別目標の例)



６．症例

①ケース：小学校中学年、A児

②問題点：個別訓練では離席が目立ち自分のペースで課題を進めた。

③グループ訓練開始前のアンケート結果：保護者からは、『興味がない時は他事を行い、他者と同じ事ができない』、小学校の先生からは『友達に自分のしたいことが上手く伝えられず、すねた態度や自分勝手な行動をとる』という回答が得られた。アンケート結果からも周囲に合わせることが難しいという共通した問題点が挙げられた。(図５)

(図５　A児の問題点)

グループ訓練では	・離席が減った ・場面にそぐわない発言が減り、落ち着いて取り組めることが増えた ・自己評価にて周りをみて相手と自分を比べる発言があった ・自ら手を挙げて発表するようになった
保護者のアンケート	・友達を気にする場面が増えた ・友達と話し合うことや自分の意見が伝えることが出来るようになった
小学校からのアンケート	・友達の状況を確認してから遊びに誘うようになった ・一旦集中が途切れても本来の活動に戻れることが増えた

④グループ訓練での様子：離席があり落ち着きがない・セラピストが話をしているにも関わらず自分の話をするなど周りを見て行動することが難しい様子であった。

⑤A児の個人目標：周囲を見て落ち着いて行動できるようになることを目標に『人のいいところをみつけてまねしよう』という個人目標を設定した。

⑥個人目標設定後のA児の変化(グループ訓練終了時)：グループ訓練内で離席や場面にそぐわない発言が減り落ちついて課題に取り組めるようになった。また、「〇君が良かった。リーダーみたいだった」と周りの友達を意識した発言も聞かれるようになった。

⑦グループ訓練終了後に実施したアンケート結果：保護者より『友達を気にする機会が増えた』、小学校の先生より『友達の状況を気にして、「○さん、今遊べる？」と誘えるようになった』という回答が得られた。また、家庭では個人目標を意識した関わりを保護者が行っていた。

グループ訓練、家庭、学校生活の中で周りを意識できようになってきたことが分かった。(図６)

(図６　個人目標設定後のA児の変化)

個別訓練では	・<u>自分のペースで課題を進める</u> ・自分の気持ちを表現することが難しい
保護者からのアンケート	・<u>他者と同じ事ができない</u>
小学校からのアンケート	・行いたいことを伝えられず、<u>自分勝手な行動をとる</u> ・切り替えに時間がかかる

⑧全体の問題点(図３)についてのA児の変化：当てられていないが先に答えてしまう事に対して、『当てられるまで答えない』ことを約束すると順番を意識出来るようになり手を挙げて発表するようになった。また、発表の際、他児と同じ意見の時は「○くんと同じです」と同調の言葉を用いて回答ができるようになった。また個人目標も意識でき、他児と自分とを比較できるようになった。

７．考察

小学生低学年・中学年を対象としたSSTグループ訓練の中で日常生活の問題点が個人によって異なっていたため、グループ訓練内でも個人目標を立てるという個別の対応をとった。その結果として、ST・保護者・子どもの三者が問題点を共有し、改めて問題点を意識できるようになった。また、言語聴覚士はグループ訓練内で、保護者は家庭内で問題点を意識し具体的な働きかけをすることにより、子どもに変化がみられた。このことにより、集団でも個別の環境設定が有効であり重要であることが考えられた。

８．まとめ

広汎性発達障害をもつ子ども達は学年が上がるにつれ、集団での問題は個別化し、より高度なコミュニケーションスキルを求められるようになる。そこで小学校低学年・中学年の子ども達に対し、SSTグループ訓練を実施した。グループ訓練では保護者や学校から得られた集団生活での問題点を課題の中に積極的に取り入れた。その結果、周囲を意識できるようになったケースがみられた。ま

た、少人数で周囲と合わせる経験を積むことで自信を持てたケースもあった。問題点に対して工夫することで子ども一人ひとりが落ちついて取り組める様になり終了時にはグループ全体が訓練開始当初よりまとまった様子になった。アンケートの結果より、グループ訓練の様子が家庭や学校生活で汎化され、個別目標が有用であることが考えられた。